

イピゲネイアの決心 : エウリピデス『アウリスのイピゲネイア』考

著者	丹下 和彦
雑誌名	研究論集
巻	97
ページ	111-123
発行年	2013-03
URL	http://doi.org/10.18956/00006084

イピゲネイアの決心

— エウリピデス『アウリスのイピゲネイア』考 —

丹 下 和 彦

要 旨

本篇は、古来作者以外の人間の手になる改竄の痕が著しいと見なされ、現代に至るまで多様なテキスト校訂の対象となっている。しかしディグル校訂のOCT版を底本とする本稿は底本の示すところを対象とする作品解釈を専らとし、テキスト校訂の問題には立ち入らない。

本篇には一貫した人物像を結べない登場人物が多い。とつぜん変心するメネラオス、曖昧な言動に終始するアキレウス、さらには直前まで死を厭う姿を見せながらとつぜん変心して犠牲死を受け入れるイピゲネイアがそれである。これは作者の人物造形力の弛緩と、その結果としての人物像の破綻であるとしか言いようがない。ただイピゲネイアの「決心」は、そうした人物像や劇の問題点を一挙に解消する力を持っており、またそれと同時に劇にエンターテインメント性を付与する役割を果たしている。

キーワード：2通の手紙、変心、曖昧、決心、デウス・エクス・マキナの解決

はじめに

本篇はエウリピデスの名の下に伝わっているけれども、そこには他の人間の手もかなりの程度加わっていると想定されている。上演年は前405年とされるが、エウリピデス本人はその前年に世を去っている。したがって上演は本人ではなく本人の子（あるいは甥）の手によってであろうと想定されている。また作品が作者の手で生前すでに完成されていたかどうかという点でも疑問が呈されている。作者の死によって未完のままに残されたものに後継の子（あるいは甥、または後世の某）が手を入れた可能性が大いにあるとされているのである（それが現在に至るまでこの作品のテキスト校訂の主要な問題となっている）。いわば本篇には、以上のことを想定せしめるだけのテキスト上の混乱が残存しているということである。

その第一はプロロゴス（劇の導入部）の様態である。現存するシナリオはアガメムノンと老召使との対話（アナペストの韻律）で始まる。これはエウリピデスの現存する他の作品にはまず見られない珍しい形式である。ふつうエウリピデスの作品のプロロゴスは、神もしくはその劇の登場人物の一人が独白の形式を取り、一定の長さ（概ね100行前後）で物語の過去、現在

の状況と、神の場合は併せて将来の展望を述べるかたちになっている（これについては喜劇詩人のアリストパネスがつとに指摘し揶揄している¹⁾）。ここから、そうした形式をとらないこのプロロゴスははたしてエウリピデスの手になるものかどうかという疑問がまず生じる。

ところが49行に至ってアガ멤ノンの独白（イアンボス調）が始まり、それが114行まで続く。それはヘレネの出生、結婚、不倫と出奔、その奪還のためのトロイア遠征、アウリスでの風待ち、カルカスの預言、イピゲネイアの招喚まで話が進み、物語のあらましを発端から現在まで通観するかたちになっている。一見してこれこそエウリピデスの従来のプロロゴスのかたちに叶うものであるといえる。事実マリー校訂によるOCT旧版の『アウリスのイピゲネイア』²⁾では、プロロゴス内の配列を変更して49～114行を1～48行に先行させ、冒頭に配している（その改訂版である最新のディグル校訂の版³⁾では元に戻されて行数の順に配列されている）。

パロドス以下の全篇にわたっても、各部分でエウリピデス以外の人間の手になる付加、削除等の改竄の可能性が指摘される。またエクソドス（劇の終末部分）もその真正さが疑われる（こうした点についてはコヴァクスが最近詳細な論考を発表している⁴⁾）。

しかし本稿ではそうしたテキスト校訂の問題には関わらない。本篇が校訂上のさまざまな問題を含むことは承知の上で、最新のディグル校訂によるOCT版を底本にして作品解釈を進めたい。この劇は過去のある時点から今のこのかたちで上演されてきた、あるいは読まれてきた。そう想定してよい。そしていまわたしたちは、この劇を賞味し解釈するにはこのかたちによる以外に方法はないのである。

1. 2通の手紙

アウリスで風待ちするギリシア軍に、預言者カルカスがアルテミス女神にイピゲネイアを人身御供として捧げよ、それなしには出港は叶うまいと告知する。窮したアガ멤ノンは娘イピゲネイアの人身御供を決意し、国元のアルゴスへ手紙を送ってイピゲネイアを呼び寄せようとする。これが第一の手紙である。しかし己の野心のために実の娘を犠牲にすることは、いかにも胴欲である。思い直して「来るに及ばず」との第二の手紙をしたため、忠実な老召使に託す。この2通の手紙に象徴されるアガ멤ノンの揺れる心を活写するのがプロロゴスの場である。

底本どおりに読めば、劇はアガ멤ノンの老召使に対する呼びかけから始まる。

ア 爺、幕舎の前へ
出て来てくれ。

老 出て参りました。何のご用でしょう、
アガ멤ノン王よ。

ア 急いでくれ。
老 急ぎましょう。
歳はとつても寝惚けてはおりませぬぞ、
目はしっかりとしております。
ア あそこに行く星は何星だ、
七つの路往くプレイアデスの近く、
いまだ中空に掛っているのはシリウスか。
音という音は、鳥の囀りも
海の波音もとんと聞こえぬ。風も
ここエウリポスでは沈黙したままだ。(1~11行)

夜明け前の広漠たるアウリスの浜辺。蝸集するギリシアの軍勢の幕舎ははまだ眠りの中にある。静寂があたりを支配している。その幕舎の一つから悩ましい思いに夜を徹したアガメムノンが苦心して書き上げた手紙を手に姿を現わす。そしてその手紙を託すべき相手、召使の老翁を呼び出す。主従のうちとけた遣り取りののち、アガメムノンの目は夜明けの空に星をたずねる。耳に聞こえるものは何もない。次いで思いは世事に転じる。アガメムノンは権力者の孤独な胸の内を吐露する。

ア 爺よ、わしはおまえが羨ましい。
また誰であれ世に知られず、名誉とも縁がないが
恙無く人生を送ってきた者が羨ましい。
名声赫々たる人間は羨ましいとは思わぬのだ。
老 しかしそこにこそ人生の華がありましょう。
ア それ、その華が躓きのもとだ。(16~21行)

アウリス出港のためにはアガメムノンの娘イピゲネイアを生贄にすべしとのカルカスの預言に驚愕し狼狽したアガメムノンは遠征を取りやめ、ギリシア全軍の解散を決意する。しかし弟メネラオスに強固に反対され、娘の生贄をやむなく承知し、アルゴスへ招喚の手紙を書く。しかし心は揺れる。迷った挙句に招喚中止の手紙を書き、老召使にこれを託そうとする。もともとアガメムノンにはトロイア遠征への野心があった⁵⁾。彼にとって総大将の地位は晴れがましいものであった。その名誉と責任感から、彼は弟の反対意見を容れる。男は仕事が第一である。彼は第一の手紙を書く。アキレウスとの婚姻が整った、すぐさまアウリスまで出向くようにと。しかし彼は思いなおす。

あのときの判断は間違っていた。もう一度思い直して書き直したのが
この手紙だ。夜の間に封を解き、また封をしたのを
爺よ、おまえは見たはずだ。
さあ、それではこの手紙を持ってアルゴスまで
行ってくれ。 (108～112行)

これが第二の手紙である。男は仕事の他に家庭を持っている。その家庭を男は自分の仕事のために犠牲にできるか。自分の仕事を遂行するために自分の娘の人生を犠牲にすることができるか。悩みぬいたアガメムノンは前者とまったく正反対の内容の手紙を書く。2通の手紙は短時間のうちに変化したアガメムノンの心境と立場をそれぞれ象徴するものである。

アガメムノンと老召使とで構成されるプロロゴスは、アガメムノンの次のせりふで終結する。

なあ、苦勞をわしと分けあってくれ。人間誰しも、
いつまでも幸せで恵まれているものではない。
悩みを持たぬ者なんていないのだからな。 (160～162行)

ここには良い意味でも悪い意味でも人間がいる。名誉と権力を有しながら、それに安住できない男。むしろそれゆえに悩む男。自分の仕事を十全に遂行し、自分の人生の頂点を迎える機会に恵まれながら、それを掴み取ることができない男。今ではその人生は苦悩の時間でしかない。名誉と権力に恵まれた男がそれゆえに悩み、そうしたものを持たない匹夫の境涯を羨むのである。

このプロロゴスは、間に冗長なアガメムノンの独白を挟むとはいえ（それは老召使と観客とを対象に劇世界の背景を紹介する役割を果たしている）、全体的に精彩に富み、アガメムノンと老召使の人間味豊かなことをよく窺わせ、観客（読者）を一挙に劇的世界へ引き込む。

2. メネラオスの奇妙な変心

アガメムノンの第二の手紙を託された老召使は、アルゴスへ向けて出発する直前にメネラオスに捕まり、手紙を奪われてしまう。取り戻そうとメネラオスに抗う召使。その争いの声を聞きつけてアガメムノンが姿を現す。アガメムノンはメネラオスが手紙を不法に入手し開封したことを非難する。メネラオスは手紙の文面からアガメムノンの変心を知り、これを詰る。そこへ使者が登場し、イピゲネイアが母親クリュタイメストラに伴われてアルゴスから到着したこ

とを知らせる。一步遅かった。娘の命を救おうと第二の手紙を書いた労も水泡に帰し、カルカスの預言通り人身御供を執行しなければならなくなる。アガメムノンは悲嘆の声を挙げる。

ああ、不幸なこの身、どう口を利いたらよい？どこから始めたらよいのだ？
なんとという必然の軛に落ち込んだものか。 (442～443行)

ひとしきり嘆いたのち、最後に彼はメネラオスに向かってこう言う。

そなたの勝ちだ、こちらは泣く身だ。 (472行)

ところが兄アガメムノンの様子を見ていたメネラオスは、思いがけない言葉を口にする。

わたしはあなたが目から涙を流すのを見て
不憫だと思った。わたしだってあなたを思って涙を流した。
さっき言った言葉は引っ込める。
わたしはあなたを責めない。いまはあなたと同じ気持ちだ。
一つ忠告しよう、あなたは子供を殺すことはしないでよい、
わたしの件を優先してもらわずともよい。正当ではないからだ、
あなたを泣かせてわたしのほうが喜ばせてもらうというのは、
あなたの家の者が死ぬのにわたしの家の者が命を拾うというのは。 (477～484行)

これはどういうことだろう。わずか100行ほど前のところでは、彼はアガメムノンの変心と不決断を厳しく責めていた。その彼がいま追い詰められたアガメムノンの姿を目の当たりにして、上のようないかにも人道主義者ふうのせりふを吐く。この急激な変心はわれわれ観客（読者）を驚かせる。それは、あり得ないことではないとはいえ、いかにも不自然だからである。メネラオス自身は「同じ親から生まれた兄弟の心遣いがあればこそ/考えを変えたのだ」(501～502行)とその理由を述べるが、その心境に行き着くまでの思考の過程がまったく描かれていないために唐突で奇妙な感を免れえないのである。それはむしろ喜劇的であるとさえ言ってもよい。ここで作者のメネラオス像の造形力はあきらかに弛緩している。劇の構造上から言っても、ここでメネラオスは敵役に徹しなければならない。肉親の情愛はあったとしても、無視しなければならない。そうすることでアガメムノンの苦悩はさらに深まり、その優柔不断ぶりがますます顕在化するのである。

メネラオスはこの第1エペイソディオンの場にだけ登場する。この場が終わる542行以下、

二度とその姿を舞台に見せない。そして本篇における彼の存在意義は甚だ曖昧である。その実態が定かではないからである。第一、ヘレネ奪還を目的とするトロイア遠征に大いに関与するメネラオスがこう物わかりがよくては困るのである。その人物像は破綻していると言わなければならない。

3. アキレウスという曖昧な存在

第3エピソードでアキレウスが登場する。ミュルミドン族を引き連れて遠征に参加したギリシア軍屈指の戦士であり、かつアガ멤ノンの策略でイピゲネイアの婿に擬せられている男である（但しアキレウス本人はイピゲネイアとの結婚話には関知していない）。

アキレウスはなぜここで登場したのか。アウリスでの風待ちが長引くのに業を煮やした部下たちに突き上げられ、総大将アガ멤ノンに出港を慫慂しようと面会を求めてのことと一応は解される。だがじっさいはイピゲネイアとの結婚話にまつわるクリュタイメストラとの面談の場に彼を繋げるための前提的措置である。それゆえにと言おうか、このアキレウスにはギリシア軍随一の英雄、出港を促す直情的な戦士、といった姿は見られない。ここに居るのは母娘の苦境に理解を示す融通性のある一人の常識人である。

アキレウスは、イピゲネイアをアウリスへ招喚するために弄された策略（結婚話）に無断で名前が使われたことを怒る。

それはアガ멤ノンがわたしに働いた無礼のせいだ。

彼はわたしに名前を貸してくれと言ってきていればよかったのだ、
娘を連れだす口実にするからと。（961～963行）

これは面子の問題である。アガ멤ノンへの怒りは一方でクリュタイメストラ母娘への同情を生む。アキレウスはイピゲネイア救出を決心する。それをクリュタイメストラにこう告げる。

さあご安心なさい。わたしはあなたにとって最大の神。

じっさいは神ではないが、いや、神となって進みましょう。（973～974行）

しかしこのときアキレウスは、イピゲネイアを人身御供から救出することがギリシア軍のアウリス出港と矛盾するものであることを忘れている。彼はクリュタイメストラにこう言うのである。

まずあの方（アガ멤ノン）に娘御を殺さないようお願いしてください。

もし嫌だと言われたらわたしの許までおいでくださればよい。
願いが叶えられればわたしの出番はありません。
そうなれば助かるわけですから。
わたしも仲間に対して今以上によい存在になれますし、
ギリシア軍がわたしを非難することもありますまい、この事態を
もしわたしが力によらず道理を尽くして処理するとすれば。 (1015～1021行)

力によるにしても道理を尽くして処理するにしても、とにかくイピゲネイアの人身御供が回避されるとなるとギリシア軍のアウリス出港はできなくなる。カルカスの預言は絶対的な強制力を持っている(アガメムノンの苦悩もまさにここにあった)。上のせりふはこの間の事情がまったく認識できていないことを示している。作者の意図するアキレウス像はいったい何なのか。

繰り返しになるが、もう一度アキレウスの口を借りる。仲間のミュルミドン族から「動いてください、動くおつもりなら。あるいは手勢を国元に帰すかしてください」(817行)と突き上げられてアキレウスはアガメムノンを訪ねた。その折に偶々出会ったクリュタイメストラからイピゲネイアとの結婚話を聞いたアキレウスは、こんどはクリュタイメストラ母娘に同情し、人身御供の回避に向かう。

いまにわたしのこの剣が知り分けよう、プリュギアへ出立する前に
わたしはこの剣を殺戮の血で汚すことになる、
もし誰かがわたしとあなたの娘御とを分け放とうとするならば。 (970～972行)

アキレウスはプリュギア(トロイア)へ出立するつもりである。そのためにはイピゲネイアの死が必要である。しかし彼はイピゲネイアを助けるつもりである。この自己矛盾はどう解決されるのか。どうやらアキレウスはこの自己矛盾に気づいていないように見える。ここに提示されたアキレウス像はまことに曖昧で不十分なものであると言わなければならない。

4. イピゲネイア、決心する

アガメムノンの2通の手紙に象徴される苦悩も、メネラオスの奇妙な変心も、アキレウスの矛盾だらけの言辞も、イピゲネイアが人身御供を受け入れることで一切解消する。

最初イピゲネイアは死ぬことを辛がった。人身御供をやめてくれるようにと父親に懇願した。

人間には陽の光を仰ぐのがいちばん嬉しいこと。

大地の下には何もありません。死にたいと願うのは
心狂えるひと。立派に死ぬより無様でも生きているほうがましです。（1250～1252行）

しかしアキレウスと面会し、アキレウスが周囲の強い反対にもかかわらずイピゲネイアをなんとか救いだそうとする姿にほだされたのか、とつぜん変心し、犠牲死を決意する。

このお客（アキレウス）をその熱意ゆえに称えるのは間違ったことではありません。
ただどしっか見届けなくてはなりません、この方が軍と敵対せぬように。
そしてこの方が不幸となるようなことは、一切わたしたちはせぬように。
お母様、わたくし思いついたことがあります。お聞きください。
わたくし、死ぬことを決心しました。願わくは賤しい心根を捨て、
見事に死に切りたいと思います。（1371～1376行）

この方（アキレウス）は一人のためにアルゴスの皆と
事を構えて死ぬようなことがあってはなりません。
殿方一人は女子一万人よりも生きる価値があります。（1392～1394行）

と、自分の身を案じてくれるアキレウスに気遣いを見せた上で、自らの死はギリシア全体のためだと理由づける。

（わたくしを）生贄にして、トロイアを攻略してください。これでわたくしは末永く
記憶されましょう。それこそわが子、わが結婚に代わるもの、わが誉れです。
ギリシアは異国の輩を支配して当然、でもお母様、異国の輩が
ギリシア人を支配することはなりません、彼らは奴隷、わたくしたちは自由人ですから。
（1398～1401行）

このイピゲネイアの変心も突然で不可解である。たとえその間にアキレウスの苦境を知る機会があったとしても、名目だけの花婿アキレウスにここまで心を寄せる理由は見つけがたい。またここまでの愛国心の発露も甚だ不自然である。このことはつとにアリストテレスも気づいていて、イピゲネイア像の不一貫性を指摘している、「首尾一貫しない性格の例は、『アウリスのイピゲネイア』である。というのは、嘆願者として救いを求めるイピゲネイアは、そのあとの彼女とはまったく似ていないからである」⁶⁾と。

この指摘は正しい。わたしたちは通常ギリシア悲劇の登場人物に性格の一貫性を求める。そ

それは極めて当然のことといえるだろう。一般に芝居のみならず小説の人物においても、性格の一貫性は求められて当然である。それが欠けているとすれば、そういう登場人物を素材として構築される物語全体の思想性はとうてい表出不能だからである。それでは芝居も小説も成り立たないことになる。

その一方で、しかしどのような人物にも恣意的な読み込みによって常に一貫性を求めようとするのは、受容者の側の悪い癖である。作意か否かは別にして、性格の破綻は破綻と認めなければならない。

イピゲネイアの「決心」はデウス・エクス・マキナ（機械仕掛けの神）の役割を果たしているとする説がある⁷⁾。これは一考に値する。イピゲネイアが人身御供を決心し、受け入れることによって、それまでの一切の問題点、矛盾点、あるいは曖昧さ（アガメムノンの苦悩、メネラオスの奇妙な変心、アキレウスの存在の曖昧さ、加えて彼女自身の変心の唐突さ、不自然さまでも）が一挙に解決され、劇は終息に向かうからである。イピゲネイアの決心を聞いてアキレウスが見せる可笑しいほどの安堵感は、そのよい証拠である。

おお類稀なるお志。わたしはもう何も言えません。

そうすることで貴女の意が叶うというのであれば、ご立派な

お考えです。（1421～1423行）

その直前まで披瀝されていた死を厭う心情からの急変ぶりが、一段とデウス・エクス・マキナの効果を高めているよう。

彼女は生身の人間ではない。無機的な存在である。愛国心の権化であり、高揚する民族意識、そのスローガンそのものである。いま彼女の口を突いて出る言葉は、まだうら若い嫁入り前の乙女のそれではない。それは言われた言葉である。「立派に死ぬより無様でも生きているほうがましです」（1252行）は彼女の本音である。「願わくは賤しい心根を捨て、見事に死に切りたいと思います」（1375～1376行）というのは言われた言葉である。彼女は生身の人間であることをやめさせられたのである。彼女は決心したのではない。決心させられたのである。彼女はデウス・エクス・マキナ的な、それでいて神ではない無機的な存在、いわば手段ないしは道具とでも言うべきものに変化させられたのである。

ではなぜ彼女は無機的な存在へ、手段へ、道具へと変化させられたのか。そして愛国的スローガンを叫ばされているのか。ここで作者の愛国的真情の有無を詮索することは控える。ただ一つだけ指摘しておきたいのは、本篇でのイピゲネイアの愛国心の強調はトロイア戦争に取材したこれまでの作品（『ヘカベ』、『トロイアの女たち』）で示された作者の反戦的主張と相容れないものがあるということである⁸⁾。作者はイピゲネイアに全ギリシアへの愛国的熱情を披

瀝させた。それはなぜだろうか。前5世紀末、ペロポネソス戦争の帰趨がアテナイにとって悪いかたちで決定しかけていた時代背景の下、それは作者の祖国アテナイへの絶望的な愛国の情を示すものだろうか。しかしここに示されているのは全ギリシア讚であってアテナイ讚ではない。狭隘な祖国愛の発露とは言い難いのである。

そもそも作者エウリピデスは人身御供という風習をどのように考えていたのだろうか。じつは人身御供は歴史時代のアテナイ人にとって決して縁遠い話ではなかった。ごく身近に体験する事象であったのである。プルタルコスが前5世紀前半の例（『対比列伝・テミストクレス伝』）と前4世紀前半の例（『対比列伝・ペロピダス伝』）を報告している。前者は前480年のペルシア戦争時のサラミスの海戦において、ギリシア方のテミストクレスが預言者エウフランティデスの預言に従って3人のペルシア人捕虜をディオニュソス神に人身御供にした例である。「テミストクレスはこの予言が酷い恐ろしいものだどと驚愕したが、[……]多数の民衆は合理的な事よりも寧ろ背理的な事柄から救いを期待するものであるから」⁹⁾、心ならずも人身御供を挙行してしまう。

後者はテバイとスパルタが争った戦争（前371年）時、テバイの将ペロピダスが人身御供の夢を見たという話から古今のさまざまな例が挙げられ、その是非が論じられ、けっきょく最終的には人間に代わって馬が犠牲に供されて一件落着する¹⁰⁾。

以上から、野蛮で残酷な人身御供という風習が戦時に特有なものであったとしても、前5世紀後半のエウリピデスたちの時代においても人々のすぐ身近に存在するものであったことがわかる¹¹⁾。そしてエウリピデスは自らの作品の中で、いかに伝承の世界の中でのこととはいえ、おそらくそれを承認することはできなかったと思われる。とはいえしかし、彼はそれを作中で否定的に扱うこともしなかった。逆にここではイピゲネイアをして、それを称揚せしめたのである。これはどういうことだろうか。

ここにはおそらくパラドキシカルな操作がある。イピゲネイアの性格の破綻という批判はじゅうぶん承知の上で彼女を変心させ、大義に殉じる崇高さを過大に強調すること、そしてそれによって観客（読者）の心の中に（単純に！）感動を喚起することである。そしてそのことによって人身御供という事実が持つ野蛮性、未開性を隠蔽することである。イピゲネイアの決心には一点の迷いもない。そのあまりにも純粹無垢な自己献身が観客（読者）の胸を打つ。それは（よく見れば嘘っぽい）とにかく文句なく美しいものであるからである（そこではもはや前後の整合性は問題にならない）。その「企まれた崇高さ」に陶醉した観客（読者）は事の野蛮性を忘却する。民族的な野蛮性、未開性は、愛国という（作られた）価値観で隠蔽されてしまうのである。これは作者が仕掛けた一つの仕掛けである。あるいは事の野蛮性を忘却するために、観客（読者）は自ら進んで「崇高さ」を求め、そこに沈潜するのである。それは舞台と観客席との理想的な共同作業と言えるだろう。そして共同作業が成功するためにはイピゲネイアの決

心は突然で、しかも完璧な変心でなければならなかった。

5. いま一つの仕掛け

自ら進んでアルテミス女神の生贄になるべくイピゲネイアは舞台を後にする。以下はその最後の言葉である。

イオー、イオー
光り耀く陽よ、
ゼウスの光よ、それとは違う人生を、
運命を、わたしは住みゆこうとしています、
お別れです、愛しき光よ。（1505～1509行）

ここには人の世との訣別を余儀なくさせられた一人の乙女の悲しみがある。行間に惜別の情が滲み出ている。それはさきほどまでの没我的な自己献身とはそぐわない。ここにおいて先ほどまでの観客（読者）の感動は憐憫に変わる。

イピゲネイアの生贄受諾によって劇中で提起されていた問題はすべて解決される。しかしこの最後の言葉を聞いて観客（読者）はイピゲネイアが生身の人間であること、まだうら若い少女であることに改めて気づくのである。彼女は死ななければならない。そして死ぬだろう。しかしその死のもたらす悲哀のスパイラルははたしてどこまで伸びるのか。それは収束することはないのか。

ここで作者はいま一つ仕掛けを講じる。1532行以下のエクソドス（最終場面）は第二の使者のクリュタイムストラへの報告で構成されている。そしてその告げるところは生贄の場でのイピゲネイアと牝鹿とのすり替えである。イピゲネイアは殺されたのではない。いまわの際に牝鹿とすり替えられて命を救われ、「(あなたのお嬢様は) きっと神々のもとへ飛んで行かれたのです」(1608行) という結末となる。これを聞いたクリュタイムストラは

こんな作り話は

わたしを慰めるために決まっている。

おまえを亡くした辛い悲しみをわたしの心から消すためです。（1616～1618行）

と嘯くが、観客（読者）は、「こんな作り話は/わたしたちを慰めるため」と理解するのではない。劇は見事にハッピーエンドに終わる。そして「神のもとへ飛んで行った」イピゲネイアは、

まさにデウス・エクス・マキナの役割を果たしたことになる。マキナ（機械）にこそ乗らないが、すべての懸案を一切帳消しにして、自らの死さえも回避して遙か天空へ飛び去ったからである。

ただこのエクソドスの場は作者エウリピデスの真筆か否か、議論の錯綜するところである。コヴァクスは、イピゲネイアの退場で劇は終わりエクソドスの場は元来無かったとして¹²⁾、牝鹿とのすり替えによるハッピーエンディングを否定する。キッターはエクソドスの場を認め、ハッピーエンディングが悲劇的カタルシスにとって代わるとする。そして作者エウリピデスは悲劇ではなくメロドラマを書いたのであると結論づける¹³⁾。コヴァクスはエクソドスの場を悲劇のトリメーターの規則も知らぬ無能な某による修復と断じるが¹⁴⁾、わたしたちとすればエウリピデスの名の下に受け取ったシナリオをその通りに読むしかない。もしエクソドスが作者エウリピデス以外の無能な某の手によるものだとしても、それは作品の受容史の一齣としてその解釈を受け入れる以外に途はない。無能な某はそう「解釈」して書き足したのであり、その書き足されたシナリオをいまわたしたちはエウリピデスの名の下に受け取っているのである。おそらくキッターもそうした理解の上で、この作品を非悲劇的なメロドラマであると断じているのである。

メロドラマであるかどうかの判定はさておいて、わたしたちはイピゲネイアの最後の言葉に読み取れる悲嘆の情がエクソドスの使者の報告によって、つまりは牝鹿とのすり替えによる救命によって慰藉されることに喜びを感じる。エクソドスはこのわたしたちへの慰藉のために存在するのである。それはこの劇のエンターテインメント的役割を果たすものだと言ってよいだろう。作者は通常の悲劇のように作中に性格の一貫した人物（たとえばメディアやヘカベ）を造形することよりも、それを捨ててむしろ劇の各場面に観客（読者）の関心を促すことのほうに意を用いている。

アガ멤ノンの逡巡、メネラオスの奇妙な変心、アキレウスの曖昧な言動、そして何よりもイピゲネイアのとつぜんの変心と不自然きわまりない自己献身の表明——作中には終始一貫して作者の作意を担う主人公が存在しない。イピゲネイアは劇の題名に名前を貸しているが、劇の主人公として観客（読者）から認められる存在ではない。観客席の一般大衆は登場人物たちのさまざまなあり方を訝しく思いつつもイピゲネイアの劇的変心に感動を覚え、最終場面での牝鹿とのすり替えによる救命に喜びを感じ、満足して劇場を後にするのである。

こうしてみるとキッターの「二流のメロドラマ」という評価¹⁵⁾は当たっているかもしれない。ただそれとは別に、劇の導入部の老召使を相手にしたアガ멤ノンの人の世についてのしみじみとした述懐は、その自然描写と相俟ってじゅうぶんに聞き出があるものと私見する。それは劇中白眉の場面であると言ってもよい。ここにわたしたちはわずかに共感を寄せうる人物をようやく見つけるのである。

註

- 1) アリストパネス『蛙』946行以下を参照。
- 2) G. Murray(ed.), *Euripidis Fabulae*, Tomus 3, Oxford, 1963(1909)
- 3) J. Diggle(ed.), *Euripidis Fabulae*, Tomus 3, Oxford, 1994
- 4) D. Kovacs, Toward a Reconstruction of the Iphigenia Aulidensis, *The Journal of Hellenic Studies* 123 (2003), pp. 77~103
- 5) 337行以下を参照。
- 6) アリストテレス『詩学』1454a31以下を参照。アリストテレス『詩学』・ホラティウス『詩論』松本仁助・岡道男訳、岩波文庫（なお線引きは省略させていただいた）。このアリストテレスの主張に対して近代の評家たちは異を唱える向きが多い。Siegelは「イピゲネイアは心象において一貫している」(H. Siegel, *Selfdelusion and Volte-face of Iphigenia in Euripides' Iphigenia at Aulis*, *Hermes*108(1980) p.315) と言い、Erbseは「精神的な核は不変」(H. Erbse, *Studien zum Prolog der Euripideischen Tragödie*, Walter de Gruyter, 1984, S.280) と言い、Conacherは「イピゲネイア像の底にある優しさは不変」(D. J. Conacher, *Euripidean Drama, Myth, Theme and Structure*, University of Toronto Press, 1967, p.263) とする。
- 7) Cf. C.E. Sorum, *Myth, Choice and Meaning in Euripides' Iphigenia at Aulis*, *American Journal of Philology* 113(1992), p.540
- 8) Cf. H. Siegel, *op. cit.*, p.314. Siegelはここに作者のアイロニーを読み取ろうとする。対夷狄意識に関しても、イピゲネイアの述べるところ（1400~1401行）をそのまま信じることは難しい。
- 9) 『ブルターク英雄伝2』河野与一訳、岩波文庫、101~102頁。
- 10) 『ブルターク英雄伝4』河野与一訳、岩波文庫、123頁にこうある、「神々が人間の血や殺戮を喜ぶと信ずるのは恐らく迷妄である」。
- 11) Cf. H.D.F. Kitto, *The Greeks*, Harmondsworth, 1958, p.102
- 12) *Op. cit.*, p.77
- 13) Cf. H.D.F. Kitto, *Greek Tragedy; A Literary Study*, A Doubleday Anchor Books, Doubleday & Company, Inc., New York, 1954, p.386
- 14) *Op. cit.*, p.78
- 15) H.D.F. Kitto, *Greek Tragedy*, p.384~386

(たんげ・かずひこ 外国語学部教授)